

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

An in-group bias in the process of consensus estimates under social categorization

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 美恵, Tamura, Mie メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/601

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



合意性推定時の内集団バイアスの生起について

——社会的カテゴリー化の下での検討——

田 村 美 恵

問 題

人は、自分自身の行った選択的行動や判断、態度などが他者と合意（共有）されている割合（以下、「合意性」）を、そのような選択を行わなかった者と比べて、過大に推定する傾向がある。このような合意性推定のあり方は、“false consensus効果”（Ross, Greene, & House, 1977；以下、FC効果）、より一般的には、“社会的投射（social projection）”（Mullen & Hu, 1988; Krueger, 1998）と呼ばれ、これまでに多くの研究で追認されてきた（for reviews, Krueger, 1998; Marks & Miller, 1987；Mullen & Hu, 1988）。また、これらの現象は、その生起を妨害すべく、被験者を“教育”¹⁾したり（Krueger & Clement, 1994）、被験者の認知的負荷を操作したりした場合（Krueger & Stanke, 2001）にも依然として見出されるなど、頑健で安定的な性質で知られている。ただし、従来の研究のほとんどは、被験者の所属する「内集団」のみを対象に、合意性推定を行わせたものであった。

これに対して、近年、現実の社会的状況を考慮し、内集団のみならず、外

1) Krueger & Clement (1994) の実験において、「教育」条件に割り当てられた被験者は、合意性推定が自分自身の態度（「賛成」や「反対」）の影響を受けること、すなわち、自分がある事柄に「賛成」の場合には、「賛成」に対する合意性を（「反対」の者よりも）過大推定しがちであることなどを、予め、教えられていた。

集団も同時に存在する状況下（以下、内集団－外集団状況）で、合意性推定のあり方について検討しようとする試みが見出されるようになってきた（e.g., Clement & Krueger, 2002; Karasawa, 2003; Krueger & Zeiger, 1993; Mullen, Dovidio, Johnson & Copper, 1992; 田村, 2007, 投稿中）。そこで明らかになったのは、FC 効果や社会的投射が「内集団」においてのみ顕著に見出されるような現象であるということである。

例えば、著者（田村, 投稿中）は、最小条件集団パラダイムを用いて、内集団－外集団状況を作り出し、合意性推定のあり方が集団間でどのように異なるのかについて検討した。その際、自己の行動（遂行）の結果を実験的に操作し、遂行結果が望ましかった場合（成功条件）と望ましくなかった場合（失敗条件）の2種類を設定した。その結果、自己の行動（遂行）結果に対する合意性を高く推定する FC 効果は、内集団においてのみ見出された。外集団においては、自己の行動の結果如何は合意性推定に影響を及ぼしておらず、FC 効果は認められなかったのである。

こうした結果は、同じく最小条件集団パラダイムを用いた Clement & Krueger (2002) でも得られている。彼らは、このような合意性推定の内集団－外集団非対称性について、“社会的カテゴリーの境界（boundaries）が社会的投射の波及に対する壁（firewalls）になる”と述べている。そして、内集団のみに自己を投射し、自己と他者の類似性／合意性を過大に推定するこうした現象が、ステレオタイプの形成や維持にも深く関わることを指摘している（Krueger, 1996, 1998）。

なお、田村（投稿中）では、上記のような「自己」の遂行（行動）の結果に関する情報以外に、「内集団他者」や「外集団他者」の遂行結果に関する情報がフィードバックされる条件も設定し、これら手がかりとなる情報の種類によって、合意性推定のあり方が集団間でどのように変動するのかについても検討した。その結果、手がかり情報が内集団他者（内集団他者条件）や外集団他者に関するもの（外集団他者条件）であった場合には、自己の場合

とは異なる合意性推定パターンが見出された。具体的には、外集団他者条件においては、当該他者の所属する集団では、当該他者の遂行結果に対する合意性が高く見積もられる一方、当該他者が所属していない集団では、これとは逆に、当該他者の遂行結果に対する合意性は低く見積もられるという「対比的」な推定パターンが見出された。一方、内集団他者条件においては、遂行結果の如何は、合意性推定のあり方に影響を及ぼしていなかった（ただし、外集団他者条件と同様、内集団と外集団とで対比的な合意性推定パターンが見出される傾向が認められた）。このような結果は、手がかり情報が何であるかによって、異なる合意性推定プロセスが働く可能性を示すものである。

ところで、一般に、内集団－外集団状況下では、人々の認知や判断、態度、行動などは、内集団にとっては、好意的あるいは有利なものに、外集団にとっては、非好意的あるいは不利なものになりやすい。このような傾向は、「内集団バイアス (ingroup bias)」と呼ばれ、従来、多くの研究で報告されてきた (e.g., Howard & Rothbart, 1980; Murnedy & Schreiber, 1984; Tajfel, Billig, Bundy & Flament, 1971; Turner, Brown & Tajfel, 1979)。

例えば、最小条件集団パラダイムを用いた Tajfel らの実験 (e.g., Billig & Tajfel, 1973; Tajfel et al., 1971) では、被験者は、一貫して、外集団のメンバーよりも内集団のメンバーに対して、より多くの金銭報酬（点数）を与え、内集団の利益を最大にしようとする傾向が見出されている。また、Howard & Rothbart (1980) では、被験者が内集団メンバーと外集団メンバーに関する行動記述（望ましい行動文と望ましくない行動文が2つの集団間で同一の比率で提示された）を再生する際、外集団の望ましくない行動については再生率が高かったが、内集団のそれについては再生率があまり高くなかった。これは、内集団の評価を低下させる恐れのあるネガティブな情報（事例）は、無視、あるいは割り引かれ (discount) がちであることを示している。

このような知見に基づけば、合意性推定の際にも、内集団にとって有利に

働くような内集団奉仕的 (group serving) な方略 (バイアス) が見い出されるであろうことは想像に難くない。

例えば、先述の田村 (投稿中) の実験では、自己、内集団他者、外集団他者の望ましい (成功)、あるいは望ましくない (失敗) 遂行結果がフィードバックされた。このような場合には、内集団の評価を高めるような情報——具体的には、自己や内集団他者の「成功」情報など——は、合意性推定の際に積極的に利用される一方、内集団の評価を低めるような情報——自己や内集団他者の「失敗」情報など——は、ほとんど利用されないのではないかと考えられる。

しかしながら、先の研究では、関心は、FC効果やFU効果といった現象が生じるか否かのみが問題とされており、内集団バイアスの生起の有無については検討されていない。

先述のように、合意性推定は、ステレオタイプ形成との関連性が指摘されており (Krueger, 1996, 1998), 加えて、内集団バイアスもステレオタイプの形成や維持と深く関わっている (e.g., Tajfel et al., 1971; Howard & Rothbart, 1980; Pettigrew, 1979) ことを踏まえれば、内集団－外集団状況下で、合意性推定時の内集団バイアスの生起の有無、及びその様相について明らかにすることは、合意性推定研究とステレオタイプ研究とを架橋する試みの一つであると思われる。

本研究では、田村 (投稿中) の実験手続きに、手がかり情報が一切与えられない条件 (以下、コントロール条件) を追加することにより、自己や内集団他者、外集団他者に関する手がかり情報がどのように利用されているかについて検討し、内集団バイアスの生起の有無、及びその生じ方について明らかにすることを試みる。

方 法

実験手続きは、本研究で新たに設定したコントロール条件を除き、田村

(投稿中)と同一である。以下の記述に当たっては、コントロール条件に関するものを中心に記述を行い、その他の手続きについては、差し障りのない範囲で記述を簡略化した。

実験参加者

公立の外国語大学学生132名（男性25名，女性107名，平均年齢19.1歳）。そのうち，実験群には113名（各実験条件に17～20名），コントロール群には19名が割り当てられた。なお，実験群の参加者は，田村（投稿中）と同一である。

手続き

実験は，第1と第2ステージの2回に分けて集団で実施した。また，実験参加者には，予め，各自の「参加者番号」を割り当てた。

第1ステージ

最小条件集団パラダイムに基づき，内集団－外集団状況を作り出すための課題を行った。実験参加者には，「認知スタイル（ものごとの判断の仕方）の個人差を調べるための調査」（第1調査）と称し，「改訂版利き脳テスト」（坂野（1988）より抜粋）を実施した。これは，「文字または数字」と「植物や動物の絵」が重なり合って描かれている16個の刺激図版を見て，「文字または数字」あるいは「植物や動物の絵」のいずれの印象が強いかを答えてもらうものである。これらの刺激をA4用紙1ページに4個ずつ印刷し，調査説明のための教示を付加して，実験参加者に配布した。

参加者は，調査冊子の所定欄に参加者番号を記入した後，自分のペースで課題に回答した。所要時間は，約5分であった。全員が回答し終えたのを確認した後，冊子を回収し，「この調査の結果については，次回（1週間後）に知らせる」と告げた。

第2ステージ

第1ステージの1週間後に，第1ステージに参加したのと同じの実験参加者に対して実施した。初めに，実験説明用の冊子1冊とマーク式の「回答用

紙」1枚を配布した。参加者が回答用紙所定欄の参加者番号をマークした後、実験説明用の冊子を参照させながら、第2ステージの実験内容の説明を行った。

(1) 合意性推定課題の提示 実験参加者にとって新奇な（既有知識の影響が少ない）合意性推定課題として、「ストループ課題」を作成、実施した。参加者には、「パラレル情報処理能力を測定するための課題」（第2調査）であると告げた。ストループ刺激の作成、及び提示コントロールは、Microsoft社製「Power Point」を用いて行い、Power Point上の画面を教室内の3つのスクリーンに投影することにより刺激提示を行った。

ストループ刺激として、「あか」「あお」「みどり」の各単語を、漢字、カタカナ、ローマ字で作成したものを用意し、そのうちの1つを提示した。その際、提示された単語には、赤色、青色、緑色のいずれかの色が付けられていた。単語は5秒ずつ、全部で5つ提示された。すべての単語が提示された直後に、スクリーン上に、『あか（または、あお／みどり）という単語が何個ありましたか』もしくは『赤色（または、青色／緑色）で書かれた単語は何個ありましたか』という問題のいずれか一方が提示された。参加者には、正しいと思う個数を「解答欄」にマークすることが求められた。

練習試行を1試行実施した後、本試行を10回行った。本試行終了後、解答用紙を回収した。回収された解答用紙は、「結果の集計のため」を装い、実験助手によって、すぐさま教室の外へ運び出された。

(2) 内集団－外集団状況の創出 その後、第1調査の（偽の）結果を、フィードバック用冊子①にて、被験者にフィードバックすることで、内集団－外集団状況を作り出した。以下に述べるような実験説明や教示、またフィードバックされる内容は、すべて、フィードバック用冊子①に記述されていた。そして、実験者の合図にあわせて、1ページずつページをめくるやり方で、教示や実験操作を行った。

最初に、「先週の課題で測定した『認知スタイル』には個人差があり、『F

型』と『G型』の2つのタイプがある」と教示した。その後、実際の結果とは関係なく、全ての参加者に、「あなたの認知スタイルは、『F型』でした」とフィードバックした。これにより、参加者にとっては、「F型（の人々）」が内集団、「G型（の人々）」が外集団となった。

引き続き、第2調査の「目的」について、以下のような説明を行った。その際、本研究の参加者が外国語大学の学生であることを考慮し、実験に対する関与度を高めるために、次のようなカバーストーリーを提示した。

「従来の研究では、認知スタイルがF型の人とG型の人とで、さまざまな課題の遂行能力に違いがあることが見出されています。今回の調査の目的は、こうした違いが『パラレル情報処理能力課題』でも見出されるかどうかを検討することです。『パラレル情報処理能力』とは、複数の情報を集中的に同時（パラレル）に処理する能力のことを意味しており、例えば、航空管制官や同時通訳者などには、この能力が高いことが要求されると言われています。10問中6問以上正解の人は、パラレル情報処理能力が高く、それ以下の人は、この能力が低いと見なされます」。

その後、実験助手に、「分析し終わったばかりの集計結果」を装って、フィードバック用冊子②を携えて教室に入ってもらった。各冊子には参加者番号が付けてあり、該当する参加者に個別に配布した。そして、実験者の合図にあわせて、参加者一斉にページをめくるやり方で、教示や実験変数の操作などを行った。

(3) 「手がかり情報」の操作 実験群の参加者は、自分の遂行結果をフィードバックされる「自己条件」、内集団他者の遂行結果をフィードバックされる「内集団他者条件」、外集団他者の遂行結果をフィードバックされる「外集団他者条件」のどれかに割り当てられた。一方、コントロール条件の参加者には、いずれの手がかり情報も与えられなかった。

手がかり情報の操作にあたっては、最初に、「認知スタイルが『F型』の人、『G型』の人、それぞれのグループ毎の全体結果については、分析にし

ばらく時間がかかります」という教示を行い、引き続き、自己条件では、「そこで今回は、あなたの結果についてのみお知らせします」と教示した。

内集団他者条件と外集団他者条件においては、上記下線部を、「コンピュータによってランダム（無作為）に選び出された一人の結果について」に代えた。

なお、コントロール条件においては、自己条件と同一の教示に引き続き、「なお、中には、回答欄の汚れやマークミス、その他の様々な理由で電算処理ができず、結果が表示されない（エラーが表示される）場合もありますが、ご了承ください（その場合、希望者には、後日、結果をお知らせします）」と教示し、手がかり情報が与えられないことの「理由付け」を予め行っておいた。

(4) 「遂行結果」の操作 「コンピュータの出力結果」と称して、「遂行結果」が記された「診断シート」を提示した。

実験群においては、遂行結果が良好である「成功条件」と不良である「失敗」条件の2通りが設定された。前者においては、「認知スタイル『F型』（外集団他者条件の場合は『G型』と表示）のあなたのパラレル情報処理能力は『高い』と診断されました」という文章を提示した。「失敗条件」においては、上記下線部を「残念ながら『低い』」に代えた。

コントロール群においては、遂行結果の表示箇所に、「エラーのため、表示されません」という文章を提示した。

(5) 従属変数の測定：内集団と外集団における合意性推定 最初に、「今回の調査は、他のクラスの学生に対しても実施されている」と告げ、全体の結果について予想してもらおうというかたちで、内集団（「あなたと同じF型の人々」と教示）と外集団（「あなたと異なるG型の人々」と教示）について、「成功」（パラレル情報処理能力が高いと診断される人）、及び「失敗」（パラレル情報処理能力が低いと診断される人）の割合について、それぞれの合計が100%になるように回答してもらった。

最後に、実験全体に対する感想を参加者に自由記述させた後、デブリーフィングを行い、実験を終了した。

以上まとめれば、実験条件に関するデザインは、手がかり情報3（自己、内集団他者、外集団他者）×遂行結果2（成功、失敗）×推定対象集団2（内集団、外集団）の3要因混交計画であった。第3要因のみ、被験者内要因である。一方、コントロール条件においては、遂行結果に関する手がかり情報が一切与えられず、内集団と外集団に対する合意性推定のみが求められた。

結果と考察

各条件毎に、内集団と外集団における「成功」²⁾に対する合意性推定値の平均値を算出した。結果をTable1に示す。なお、実験群のデータは、田村（投稿中）と同一であり、先述のように、既に分析済みである。

Table 1

各実験条件、及びコントロール条件における「成功」に対する平均合意性推定値 (SD)

手がかり情報	遂行結果	推定集団	
		内集団	外集団
自 己	成 功	60.25 (15.60)*** ¹⁾	59.00 (17.14)
	失 敗	46.50 (13.87)	59.25 (11.95)
内 集 団 他 者	成 功	44.00 (16.43)	54.50 (16.05) ⁺
	失 敗	37.22 (12.27)	61.67 (10.98)
外 集 団 他 者	成 功	34.72 (14.90)	64.17 (16.02)
	失 敗	50.29 (17.18) ⁺	52.06 (13.81)*
なし（コントロール）	なし	40.79 (15.30)	62.90 (14.17)

1) コントロール条件とのt検定の結果。 *** $p < .001$ * $p < .05$ + $p < .10$

各実験条件において、手がかり情報がどのように利用されているのかについて検討するため、各実験条件の平均合意性推定値とコントロール条件のそれとの間でt検定を行った。以下では、手がかり情報の種類毎に分析を行う。

2) 先述のように、本研究では、「成功」と「失敗」に対する合意性について、それぞれの合計が100%になるように推定させている。そのため、今回は、「成功」に対する推定値のみを分析対象とした。

1. 手がかり情報が「自己」の場合

t 検定の結果、コントロール条件との間で有意差が見出されたのは、自己の遂行結果が「成功」の場合に、内集団に関する合意性推定を行う条件のみであった ($t(37)=3.9, p<.001$)。そこでは、自己の遂行結果が「成功」であった場合には、内集団全体における「成功」の割合が、そうした情報を与えられなかった場合よりも、有意に高く見積もられていた。一方、自己の遂行結果が「失敗」であった場合には、内集団に対する合意性推定値は、コントロール条件との間で有意差が得られなかった。

これらのことは、自己が「成功」であった場合には、それがベース／係留点 (Clement & Krueger, 2002) となって、内集団全体での「成功」の割合も高く見積もられるが、「失敗」の場合には、無視されたり割り引かれるなどして、その情報はほとんど利用されないことを示している。

そもそも、事例情報 (case information) は、それがたとえ「1つ」 (a single case information) でも、ベースレートの推定に影響を及ぼす (e.g., Hamill, Wilson, & Nisbett, 1980) とされている。したがって、自己の遂行結果に関する情報は、それが「成功」であるか「失敗」であるかに関わらず、合意性推定に利用されて然るべきである。しかしながら、実際には、「成功」情報のみが利用され、(それをベース／係留点として合意性推定が行われると) 集団全体の評価を低下させる恐れのある「失敗」情報は、利用されていなかった。これらのことは、「内集団の評価を直接的に高めるような情報が偏重される」というかたちの内集団バイアスの存在を示すものと言えるだろう。

なお、外集団の推定に際しては、自己の遂行結果の情報は、それが「成功」の場合にも「失敗」の場合にもほとんど利用されていなかった。これについては、「自己」は、外集団とは無関連 (irrelevant) なものと見なされており (Clement & Krueger, 2002), 外集団に関する合意性推定の「手がかり」としては利用価値が低いと捉えられていることの表れであると言えるだろう。

2. 手がかりが「内集団他者」の場合

「内集団他者」の遂行結果をフィードバックされた場合について、各実験条件における合意性推定値とコントロール条件のそれとの比較を t 検定で行った。その結果、内集団他者の遂行結果が「成功」の場合で、なおかつ、外集団に対する合意性推定を行う条件においてのみ、有意な傾向が見出された ($t(37)=1.73, p<.10$)。そこでは、内集団他者の遂行結果が「成功」であった場合には、外集団全体における「成功」の割合が、そうした情報を与えられなかった場合よりも、「低く」推定される傾向があった。

なお、内集団他者の遂行結果が「失敗」であった場合には、このような結果は見出されなかった。すなわち、外集団の推定に関しては、内集団他者の「成功」情報のみが利用され、「失敗」情報は利用されない傾向が認められた。

内集団他者の「成功」情報は、内集団全体の評価を高めうるものであると同時に、それとの対比で、間接的に、外集団の評価を低下させうる側面を有していると考えられる³⁾（そのことが再び、内集団全体の評価を高揚させることにも繋がるだろう）。逆に、内集団他者の「失敗」情報は、内集団全体の評価を低下させると同時に、それとの対比で、外集団の評価を上昇させる側面があると考えられる。こうした点を考慮すれば、本研究において、外集団の評価を低下させうる内集団他者の「成功」情報のみが利用される傾向が見出されたことには、被験者の内集団奉仕的 (ingroup serving) な志向性を見て取ることが出来る。

なお、内集団の推定に際しては、内集団他者の遂行結果の情報は、それが「成功」であるか「失敗」であるかに関わらず、ほとんど利用されていなかった。これについては、本研究の参加者が合意性推定課題を実際に体験してい

3) 内集団と外集団の評価が対比的に行われることは、例えば、Gawronski, Bodenhausen, & Banse (2005, 研究3) において示されている。彼らは、内集団-外集団状況下で、内集団他者のポジティブまたはネガティブな情報（行動事例）を提示し、「外集団」に対する印象評定を行わせた。その結果、内集団他者のポジティブ事例が提示された場合には、外集団に対する印象はよりネガティブになり、内集団他者のネガティブ事例が提示された場合には、外集団に対する印象はよりポジティブになっていた。

たことに拠るところが大きいと思われる。彼らは、自分自身の遂行結果（出来不出来）に対して、ある種のイメージ（予期）を有していた可能性が高いが、（自己が所属する）内集団に関する推定の際には、そうした予期が自動的に活性化され、そのために、内集団他者情報の影響力が低下したためと考えられる。

3. 手がかりが「外集団他者」情報の場合

「外集団他者」の遂行結果をフィードバックされた場合について、各実験条件における合意性推定値とコントロール条件のそれとの比較を t 検定で行った。その結果、内集団と外集団のいずれの集団に関しても、外集団他者の遂行結果が「失敗」の場合にのみ、コントロール条件との間で、合意性推定値に有意な差が見られた。具体的には、外集団他者の「失敗」情報が与えられ場合には、「内集団」全体に対する「成功」の割合は、コントロール条件よりも「高く」推定される傾向があった ($t(34)=1.76, p<.10$) のに対して、「外集団」に対する「成功」の割合は、コントロール条件よりも有意に「低く」推定されていた ($t(34)=2.32, p<.05$)。

なお、外集団他者の遂行結果が「成功」の場合には、このような結果が見出されず、外集団他者の「成功」情報は、合意性推定に際して、ほとんど利用されていなかった。

このような結果は、基本的には、上述した内集団他者情報の場合と同じように考えることが出来るだろう。すなわち、外集団他者の「失敗」情報は、外集団全体の評価を低下させるものであると同時に、それとの対比で、間接的にはあるが、内集団の評価を高揚させうるものであると考えられる。一方、これとは逆に、外集団他者の「成功」情報は、内集団の評価を相対的に低下させる可能性を有している。このため、合意性推定に際しては、内集団にとって脅威となりうる外集団他者の「成功」情報は利用されず、内集団を有利に導きうるような外集団他者の「失敗」情報のみが利用されたものと考え

えられる。ここには、「内集団の評価を間接的に高めるような情報が偏重される」という内集団奉仕的な方略（バイアス）を見て取ることが出来るだろう。

ま と め

本研究では、社会的カテゴリー化の下で、内集団や外集団に関する合意性推定を行う際に、内集団バイアスが生じるのか否か、またそれがどのような様相を取るのかについて、手がかりとなる情報が「自己」「内集団他者」「外集団他者」のそれぞれの場合について検討した。その結果、いずれの手がかりを与えられた場合にも、内集団バイアスが認められた。それらは、内集団の評価を直接的、間接的に高揚させるような手がかり情報のみを積極的に利用するというかたちで生起していた。逆に言えば、外集団の評価を積極的に高めるような事例（典型的には、外集団他者の「成功」情報）は、それが内集団にとって「脅威」と見なされる限りは、無視されたり割り引かれたりして、ほとんど利用されていなかったのである。

まとめれば、本研究が示したのは、社会的カテゴリー化のもとで行われる内集団や外集団に関する合意性推定は、サンプル情報（事例）の偏った利用の上に成り立っているものであるということである。こうした見解は、ステレオタイプの問題にどのような示唆を与えうるだろうか。

近年、Krueger (1996) は、「社会的に共有された認知 (socially shared cognition)」であると見なされることの多い「ステレオタイプ」が、実は、対象集団に対する認知者個人の信念 (personal beliefs) をかなり反映したものである可能性を指摘している。つまり、認知者は、対象集団に対する個人的な信念を他の人々に投射 (projection) し、当該集団に対する「一般的な見方 (=ステレオタイプ)」であると思いこんでしまうというわけである (projection model of stereotyping)。

一方、本研究が示したように、投射の過程には、自集団を有利に（外集団

を不利に) 導こうとする集団間バイアスが潜んでいる可能性が高い。

これらの見解を踏まえれば、ステレオタイプは、「歪められた」投射の「結果」を、「社会的に共有／合意されたもの」であると一般化／妥当化してしまうというリスクを常に含んでいるものと言えるだろう。

本研究が見出したような内集団バイアスは、集団間の関係が葛藤状態や紛争状態にあるときにより高まることが考えられる。今後は、集団間の関係を実験的に操作し、合意性推定（投射）パターンや内集団バイアスの生じ方がどのように変化するかについても検討していく必要があるだろう。

引用文献

- Billig, M., & Tajfel, H. 1973 Social categorization and similarity in intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 3, 27-52.
- Clement, R. W., & Krueger, J. 2002 Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 219-231.
- Hamill, R., Wilson, T. D., & Nisbett, R. E. 1980 Insensitivity to sample bias: Generalizing from atypical cases. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 578-589.
- Howard, J. W., & Rothbart, M. 1980 Social categorization and memory for in-group and out-group behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 301-310.
- Karasawa, M. 2003 Projecting group liking and ethnocentrism on in-group members: False consensus effect of attitude strength. *Asian Journal of Social Psychology*, 6, 103-116.
- Krueger, J. 1996 Personal beliefs and cultural stereotypes about racial characteristics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 536-548.
- Krueger, J. 1998 On the perception of social consensus. In M. P. Zanna(Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol.30, pp.163-240. San Diego, CA: Academic Press.
- Krueger, J., & Clement, R. W. 1994 The truly false consensus effect: An

- ineradicable and egocentric bias in social perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 594-610.
- Krueger, J., & Stanke, D. 2001 The role of self-referent and other-referent knowledge in perceptions of group characteristics. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 878-888.
- Krueger, J., & Zeiger, J. S. 1993 Social categorization and the truly false consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 670-680.
- Marks, G., & Miller, N. 1987 Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoretical review. *Psychological Bulletin*, **102**, 72-90.
- Mullen, B., Dovidio, J. F., Johnson, C., & Copper, C. 1992 In-group-out-group differences in social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, **28**, 422-440.
- Mullen, B., & Hu, L. 1988 Social projection as a function of cognitive mechanisms: Two meta-analytic integrations. *British Journal of Social Psychology*, **27**, 333-356.
- Mummedy, A., & Schreiber, H. J. 1984 "Different" just means "better": Some obvious and some hidden pathways to in-group favoritism. *British Journal of Social Psychology*, **23**, 363-368.
- Ross, L., Greene, D., & House, P. 1977 The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301.
- 坂野 登 1998 子どものころを読む 青木書店.
- Tajfel, H., Billig, M., Bundy, R. P., & Flament, C. 1971 Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.
- 田村美恵 2007 社会的カテゴリー化が合意性推定に及ぼす影響 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 772-773.
- 田村美恵 投稿中 社会的カテゴリー化の下での合意性推定—自己, 内集団他者, 外集団他者に関する手がかり情報の影響—
- Turner, J. C., Brown, R. J., & Tajfel, H. 1979 Social comparison and group interest in ingroup favoritism. *European Journal of Social Psychology*, **9**, 187-204.